『源氏物語』――光源氏の「涙の滝」と義経の「涙の滝」

須藤　圭

『源氏物語』と京都

京都は、いったい、どのような場所といえるだろうか。京都のイメージを形づくる文学のひとつに、平安時代中期、紫式部によって書かれた『源氏物語』がある。稀代の貴公子・光源氏を主人公にしながら、宮中で育まれた華やかな王朝文化を描いたこの物語は、いうまでもなく、京都を舞台にする。そのため、この歴史の延長線上に位置する京都は、「王朝文化の薫りをいまにとどめるまち」と捉えられることも多い。

たとえば、現在、京都市の南に位置する宇治市には、「宇治十帖古跡（うじじゅうじょうこせき）」と呼ばれる観光スポットがある。[*1] 宇治十帖とは、『源氏物語』の後半部分、第四五帖・橋姫巻から第五四帖・夢浮橋巻までの十帖を指し、光源氏の亡きあと、宇治を主な

注

＊1　『源氏物語』と宇治のかかわりについては、宇治文庫2『平安時代の宇治』（宇治市教育委員会、一九九〇年）、宇治市歴史資料館図録『宇治名所図会―旅へのいざない―』（宇治市歴史資料館、一九九八年）、安藤徹「『源氏物語』のまち・宇治　史蹟と観光文化」（叢書・〈知〉の森5『源氏文化の時空』森話社、二〇〇五年）、高木博志「古典文学と近代京都をめぐる素描―名所の女性化と源氏物語千年紀―」（『歴史評論』七〇二、二〇〇八年一〇月）などに詳しい。

舞台として展開される、薫（かおる）やその愛を受けた浮舟（うきふね）たちをめぐる悲恋の物語をいう。「宇治十帖古跡」は、その名前のとおり、宇治十帖にもとづいて作られた十の古跡である。[*2] 神社であったり、石仏であったり、石碑であったりと、形状はさまざまだが、宇治十帖の一つひとつの巻名を冠した「橋姫神社」「蜻蛉石」「夢浮橋巻之古跡」などを指す。宇治市を訪れた人々は、急流の宇治川を眺めながら、「橋姫神社」を訪れ、この物語の背後にある宇治の伝承を知り、「蜻蛉石」のそばで、浮舟の行く末を案じ、紫式部像と宇治川を背後にすえた「夢浮橋巻之古跡」の石碑のもとで、薫と浮舟の未来に想いを馳せる。宇治は、決して、華やかな宮中での生活を思い起こさせるものではないけれども、陰影のある、美しい王朝絵巻的な世界をイメージさせることだけは確からしい。

宇治市だけではなく、京都市内にも、『源氏物語』とかかわりの深い場所は点在する。たとえば、京都市下京区には、『源氏物語』の登場人物である夕顔の墓とされる「夕顔塚（ゆうがおづか）」がある。『都名所図会（みやこめいしょずえ）』（安永九年（一七八〇）刊）[*3] にも掲載されていて、江戸時代以前から残る古跡といえる。夕顔は、柔らかく、控えめな女性で、光源氏の心を強く捉えるものの、物の怪に祟られ、あっけなく亡くなってしまった人物。人々は、「夕顔塚」のあたりを訪れるたびに、はかなく散った

＊2 「宇治十帖古跡」が、いつ頃から存在したかはわかっていない。『平安時代の宇治』（前掲＊1）は、『平等院旧起』（寛永一七年（一六四〇）成立）に「惣而、宇治十帖の名所あり。橋姫、椎本、角総、早蕨、東屋、宿木、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋也。」（『平等院大観　第一巻　建築』岩波書店、一九八八年）とあることから、この頃には存在していたものと解き、安藤（前掲＊1）も従うようだが、これは、宇治十帖の巻名を単に列挙したものと考えられる。宇治十帖にかかわる古跡だからといって、十の古跡が存在していなければならないわけではない。十の古跡として成立するのは、おそらく、近代以降のことだろう。後考を俟つ。

＊3 『新修京都叢書　第六巻』（臨川書店、一九六七年）

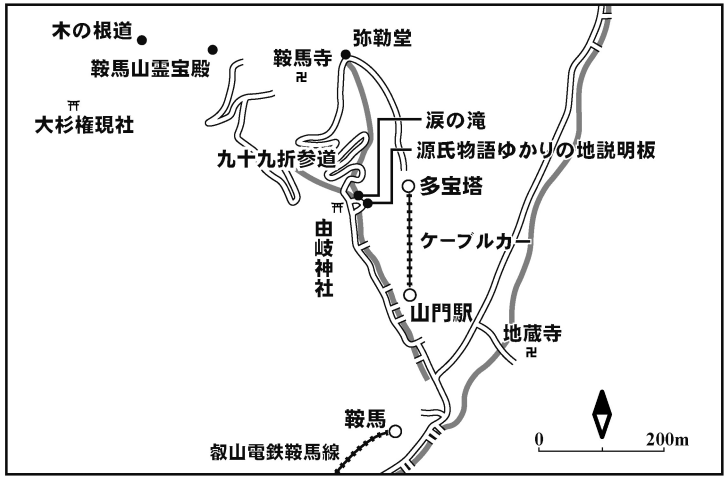

図１ 「涙の滝」周辺図。鞍馬寺へ続く九十九折参道の途中に「涙の滝」がある。

図２ 鞍馬山の「涙の滝」。由岐神社のそばで、静かに水を落としている（なお、図中に見える駒札は、2018 年 7 月の豪雨で流失したという）。